OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「五・七・五」で学ぶ上級会話 : 視聴覚教材としての映画選択における指標作成に向けて
Author(s)	小南, 淳子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2011, 9, p. 39-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10550
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「五・七・五」で学ぶ上級会話
―視聴覚教材としての映画選択における指標作成に向けて―

小南　淳子

【要旨】

映画『恋は五・七・五！―全国高校生俳句甲子園大会―』を使って、上級会話の授業を、数学期にわたって少しずつ変化させながら展開してきた。“若者の日常的な会話表現を、映像を通じて理解する”という単純な動機から選んだ教材の一つであったが、授業で用いているうちに、映画そのもののユニークな内容と展開にも助けられて、アンケートやインタビューの実施、日本社会や文化の諸様相についての考察、またそれらの口頭発表というように、会話授業の諸要素を入れながら13回の授業としてまとまりをもたせることができてきた。そして、その最終形は、俳句づくりから合評会（句会のまねごと）までを何度か取り入れたものになった。

俳句について説明したいことは多くあるのだが、実習の授業であることから、講義が多くなることは好ましくない。そこで、内容理解のための最低限の知識をいかにして与えるかを考えなくてはならないが、映画の中に出てくる授業風景の中の板書をそのまま利用したり、登場人物の会話を用いたりしながらの説明をこころがけることで、実習時間の確保に努めた。

帰国子女である主人公が、俳句を詠むことを通じて日本の文化や心になじんでいくプロセスは、留学生にとって共感できるものであるし、また、映画の中で俳句初心者のメンバーが、徐々に俳句に必要な「季語」「切れ字」を学んでいくにつれて、受講者の詠む俳句も、週を追ってレベルアップしていくことになる。（俳句甲子園の競技形式をそのまま授業内で復元することは難しいので、句会はNHKBS放送の『俳句王国』の形を借りている。）そして少ない回数の授業の中であっても、学生たちは、互いに自由に鑑賞をし、意見を述べ合い、やがて「作り手と読み手の思いが違うこともある」が、「そこがまたおもしろい」といった俳句の本質的な理解に到達さえする。

視聴覚教材としての映画の選択基準について考察するとともに、その基準にしたがって選んだ映画を用いた授業の、試行錯誤の末の一つの展開例として、報告したいと考えている。

Ⅰ．はじめに

本学において長く上級会話の授業を担当してきたが、いつも感じるとても基本的な難しさがある。口頭発表のためのきっかけとして、資料や映像を使用することがよくあるのだが、視聴の時間が多くなると聴解の授業のようになるし、内容の理解を促すために説明をしようとすると講義のようになるし、それらの時間的解消のためにスクリプトを用意することもあるが読解の授業のようになることもある。知ってほしい事柄があり、わかってほしいという思いが強いほどに、そのようになり、会話の授業でなくなっていく。学生は黙って映像に向かい、教師の話を聞き、文章を読んでいる。また、特に、受講生の人数が多いときには、配慮を怠ると、会話実習の授業であるにもかかわらず、一度も発言せずに90分を終える学生も出てきてしまう。つまり、いずれにしても、本来の授業の目的・意図に反して、学生の会話実習の時間を確保することが、かなり意識しなくては難しいのである。授業担当者は、それぞれに工夫をしながら、これに取り組んでいると思うので、そのひとつとして、私の授業報告も何らかの役に立つかもしれない、と期待する。

映像を使用した会話授業を行うようにとの指示があったことを端緒として、いくつかの映画を使用したJ/MAコースの授業を、複数年度にわたり、試行錯誤を繰り返しながら行ってきた。対象学生は、文法の理解もあり、語彙も豊富である。私は授業のねらいとして、自然な会話ができるようになることや、知識に基づいたディスカッションやプレゼンテーションのスキルといった不可欠なものに加えて、①ことばのバックグラウンドを知ること　②日本語テキストにない現時点の日本の風潮を考えること　③日本文化に親しみ楽しむこと　など、留学生活の中だからこそできる付加的な要素を、その時々に応じて意識した授業をしたいと考えている。

今回の報告では、まず、教材としての映画の選択についての私自身の基準を明らかにすることからはじめ、受講学生の活動時間を極力確保することを考慮しながら、具体的には会話授業の諸要素（口頭発表・ディスカッション・インタビュー・アンケートなど）を、雑多にならずに、互いに関連づけつつ、スムーズな流れの中で行うことをめざして実践した授業展開例を示して行きたい。授業中に使用したアンケートのシート、スクリプトなどのハンドアウト類は可能な限り載せるようにした。

Ⅱ．視聴覚教材としての映画

留学生に対する日本語教育の教材として使用する映画は、どういうものが適切だろうか。教材としての映画の選択基準は、たいへん重要なことであると思うが、明確な指標となるものはなく、授業担当者の良識や嗜好に任されているのが現状である。私自身、映画がたいへん好きなので、最初はいくらでも選べると考えてのぞんだ。しかし、本来、主として娯楽のために製作されているものであって、留学生の日本語日本文化の教材として作られてはいないのであるから、「視聴覚教材として」選ぼうとすると、自分自身の心に残っている映画からでさえ、選ぶことが実に難しい。映画そのものとしての評価が高いにこしたことはないが、たとえば話題作あるいは問題作といわれるもの、また日本アカデミー賞はじめいろんな賞の受賞作品などがすべて適切かといえば決してそうではない。

まず、日本語教育者としての立場から、学生に興味を持ってもらいたい内容であり、話題であることが必要である。会話の授業で用いることを考えるなら、ディスカッションやプレゼンテーションのテーマに展開しやすいかどうかも考えておかなくてはならないだろう。学生たちの興味に合うかどうかも、学習意欲につながるので、重要であることはいうまでもない。

そして、授業で使う場合、実際には数度に分けて使うことが多いので、何度かに分割して視聴することに耐える構成であるかどうかを見極めることも、たいへん重要だと考えている。映画の構成単位は、加藤幹郎が「直線的な結合」と表現しているように、映画館でひといきに観ることを前提に作られているものであり[1)]、途中で分けても、興味を途切れさせずに流れを追っていけるような、こちらの事情に都合のいい映画は、なかなか見つからなくて当然ともいえる。

つぎに会話の速さが適当であるかどうかである。ドキュメンタリー番組などでは、ナレーションのスピードに問題があるものはあまりないが、映画では会話のスピードがそれぞれまったく違うので、事前にチェックして、クラスのレベルにあったスピードであることを確認しておかなくてはならない。近年の映画は、会話のテンポが早いものが多いので、適当なペースで会話が進むものを探すのは、なかなか難しい。日常からかけ離れたテンションで、たたみかけるように、いくつもの会話をかぶせているものも多い。これらは日本語を学ぶ留学生には適切では

なく、視聴する際に聞き取りが難しく、誤解も生じやすいので、注意しなければならないと考えている。

内容がよいものでも、制作年代の古いものは、今の時代に用いないような会話表現も多く見られ、適切とは思えない。小津安二郎作品[2]や黒澤明作品など、いわゆる名作といわれるものも多く含まれることになってしまうのだが、留学生の中には思い入れのある者もいるので、これらは、また別の目的をもって使用することは可能だと思う。

原作の有無と、原作がある場合には原作に沿った内容・表現であるかどうかも確認しておく必要がある。参考資料として紹介する場合に、原作とあまりに隔たりのあるものは使えないからである。最近の日本映画は、コミックやインターネット小説を原作とするものも多く、確認作業も多様になる。

また、地方が舞台である映画では、意識的に方言を強く用いている[3]。地方都市には、留学生にぜひ見せたいと思う日本の原風景が残されていたり、独特の地域社会のつながりがみられたりするので、魅力的なものも実は多いのだが、これらは、日本語学習の途上にある留学生にとって、音声、イントネーション、アクセントなど、混乱を招くこともあるので、避けるべきだと考えている。ただ、関西の方言については、学生たちが今現在暮らしている土地でもあり、おそらく彼らの日常生活になじんでいることばでもあるので、避けるべき方言映画の基準には入れていない。

あと、今一度内容に戻って付加するなら、視聴の対象が留学生であることから、注意しなければならないことが多くある。たとえば、特定の国の人が凶悪犯やからかいの対象になっているようなものは選択できないだろうし、宗教や文化の違いがそれぞれにあるので、セックスシーンに嫌悪感を持つ学生もあり、選択できないこともある。近い歴史の中で、戦争や内戦経験を持つ国の出身者がいる場合、戦争シーンそのものも扱いには注意が必要だろう。それらの基準はR15・R12指定を当てにできるものではまったくなく、必ず、個々の映画にあたって、ていねいにチェックしなくてはならない。

私は、できればクラスの全員が教材に対して公平に臨めるように、みなが初めて観る映画がよいと考えているので、所謂ミニシアター系のものから選ぶことが多かった。

*

ただ、以上のことをすべてクリアしたものを探すというのは、実は至難の業である。したがって、現実には、それぞれの映画についての多少の問題点を認識した上で、それらをカバーしながら扱っていく、ということになる。

*

先に掲げた一定の指標にしたがって選んだ映画には、次のようなものがある。[4]

◇『恋は五・七・五！ ― 全国高校生俳句甲子園大会 ―』　監督・脚本　荻上直子（2004）
◇『かもめ食堂』　監督　荻上直子（2005）
◇『めがね』　監督　荻上直子（2007）
◇『ＵＤＯＮ』　監督　本広克行（2006）
◇『トニー滝谷』　監督　市川準（2004）
◇『ひみつの花園』　監督　矢口史靖（1997）

◇『大阪ハムレット』　監督　光石富士朗（2008）
◇『亀は意外と速く泳ぐ』　監督　三木聡（2005）
◇『サマータイムマシン・ブルース』　監督　本広克行（2005）
◇『ＡＬＷＡＹＳ　三丁目の夕日』　監督　山崎貴（2005）

意図的にそうしたわけではなく偶然なのだが、『恋は五・七・五！』から『めがね』の３作品は同じ監督（荻上直子）によるものである。会話のスピードや物語の展開に対する監督の嗜好が、こちらの意図とあっているということなのだろう。

『ＵＤＯＮ』は、香川県が舞台で、金毘羅宮なども登場する。方言が多少入るが、関西弁に近いので、許容範囲内とした。留学生が見学に行ったりしていれば、うまく使える要素がある。また、うどんは留学生が日本に来て一番早く親しむ麺類なので、興味を持ってみてもらえる。手でこねる製法で、ひとりで営業している小さな製麺所がとても多くあることにもおどろくようだ。瀬戸大橋の映像は美しいし、西国八十八ヵ所巡礼に興味を持つものもいる。

『トニー滝谷』は、村上春樹原作の短編佳作を映画化したものである。短編ながら村上文学の特徴とされる“喪失感”が端的に表されていて、村上春樹を好きな者には大変うれしい作品である。文春文庫『レキシントンの幽霊』[5]所収の同名小説がほとんど文章の変更なく用いられているので、小説をそのままスクリプトとして利用できる。同氏の『若い読者のための短編小説案内』[6]が、作者自身の短編小説に臨む姿勢などを明らかにしているので、参考文献として使うことができる。戦時中の上海バンスキング、戦後の日本のジャズ、さまざまな依存症など、いくつかの発表やディスカッションのテーマを導き出すこともできる。

『ひみつの花園』・『亀は意外と速く泳ぐ』・『サマータイムマシン・ブルース』は、いずれも少し現実離れしたコメディーであるが、「ありふれた日常をどう生きるか」についてのディスカッションのきっかけにすると、学生たちの能力に頼っている感もあるのだが、思いがけず活発な展開になった。ただ、『亀は…』は、某国工作員を皮肉っぽくからかうような要素があるので、注意が必要だと考えている。

『大阪ハムレット』は、実際に足を運ぶことができる風景が出てくるので、学生たちは喜んで視聴してくれる。父親の満中陰の前に、転がり込んできた叔父が同居を始めた。それを教師から「ハムレットのよう」だといわれたことがきっかけで、『ハムレット』の本を読みながら自分の悩みと向き合っていくヤンキーの次男を中心に、複雑な状況でも、ありのままにあたたかく暮らしていく家族の物語になっている。大阪の街の雰囲気を感じたり、現代の家族関係からコンプレックス、性同一性障害などのマイノリティーの問題まで、ディスカッションのきっかけにできるところが多くあるので、使いやすい映画である。同名のコミック[7]が原作である。

『ＡＬＷＡＹＳ　三丁目の夕日』は、昭和30年代の暮らしの様子がよく描かれている。これもコミックが原作である[8]。集団就職の列車、東京タワー、小さな個人営業の自動車修理工場、最初期のテレビ・洗濯機などの電化製品、駄菓子屋、少年雑誌のはじまりなど、多くの話題を提供してくれる。また、あきらかに芥川龍之介や吉行淳之介を捩った登場人物の名前が出てくるので、これも話題にできる。

Ⅲ．授業の内容

（1）『恋は五・七・五！ ― 全国高校生俳句甲子園大会 ―』

Ⅱで述べた指標に従って選んだ映画のひとつが『恋は五・七・五！』（2004年／配給　シネカノン／監督脚本　荻上直子／製作　二宮清隆、李鳳宇、細野義朗／企画　瀬崎巌／キャスト　関めぐみ・細山田隆人・高岡早紀・杉本哲太　ほか）である。高校生の日常会話が、方言を入れずに、比較的わかりやすいスピードで展開されているし、現代の日本が抱えているいくつかの社会問題に広げていくことも可能であり、俳句という日本文学のひとつのジャンルに触れることもできる。かなり細かく分けて視聴しても、ストーリーが追いやすく、興味が損なわれにくい映画だと思う。さらに、受講者に公平な立場で授業に参加してもらうために重要だと考えている「だれも今までに見ていない」という基準も100％クリアできた。

主人公の高山治子は帰国子女で、日本の文化や思考にカルチャーギャップを感じ、なじめないでいる存在。そんな彼女が俳句作りを通じて次第に日本の風土や言葉に親しみを持ち、友情を育んでいくようすは、留学生の日本理解のプロセスに通じるものがあり、共感しやすい内容になっている。

この映画は、先にも述べたとおり、授業開始にあたって学生に聞いてみたが、見たことのある学生は今までいなかった。しかし、監督の荻上直子は、『かもめ食堂』を手がけた人で、こちらは知っている学生が大変多く、拒否反応なく入っていけるひとつの要素となる。また、この映画のモデルとなったのは、今や俳句甲子園常連校である大阪府立吹田東高等学校で、平成14年第５回松山俳句甲子園における敗者復活からの優勝校である。これは、正岡子規以来の俳句の土壌がある愛媛県内の高校が独占していた優勝にストップをかけたもので、快挙であったらしい。吹田東高校は、地理的に近いだけでなく、大阪大学との協同プロジェクトとして「青葉丘セミナー」などの取り組みもある。それらを伝えることにより、親しみを感じてもらうこともできたようだ。

あらすじ　夏の全国高校野球選手権大会予選で、甲子園出場の夢やぶれた松尾高校。統廃合までの二年間に、校名を歴史に残したいと願う校長の指示により、俳句甲子園に出場することになる。顧問は、気の弱い国語教師の高田マスオ。部員は日本の学校に違和感をもっている帰国子女の高山治子、野球部（補欠メンバー）出身の山岸実、太めの体型のせいでチアリーダー部を追い出された内海マコ、高田が顧問を務める写真部が夏季限定で俳句部になったために自動的に部員になったツッチー（土山）。５人ひと組が俳句甲子園の出場条件なので、４人では…。そこへ治子に憧れるウクレレ少女ピーちゃんが登場。５人は「ダサイし、おしゃれじゃないし、かっこよくないし、年寄りの趣味にしか思えない」俳句と向き合っていくことになる。前年の優勝校である古池高校に見学に行ったメンバーは、練習句会ですっかり自信をなくすが、高田は「楽しんで詠まなきゃ意味がない」とみんなをはげますのだった。そして、いよいよ、俳句甲子園の日がやってくる。全国から松山に集まってきた強豪たちを前に、予選ではあえなく敗退するが、敗者復活戦がはじまると、５人の心はひとつになっていく。（松尾高校、古池高校というネーミングそのものも楽しい。）愛媛県松山市で実際に開かれている「俳句甲子園」を舞台にした、文化部系青春コメディーである。

（2）授業の展開　全13コマ

劇中に出てくる俳句については、若干の説明は加えたが、俳句をつくることが目的の授業ではないので、多くの解説は必要ではないと考えている。物語の中で、俳句部員たちの俳句が徐々に上達していく様子は、多くを語らなくても受講生たちは感じ取っているし、俳句甲子園の競技における対戦形式そのものの中に、質疑応答という形での必要な状況説明や鑑賞も含まれている場合も多いので、それらを最大限利用した。実際の俳句作りにも、それら劇中の俳句は、大いに参考になっていた。アンケート調査の実施や調査結果の口頭発表は、映画の内容を理解するうえでも役立つと考えたので、第1回から第5回までの授業で行っている。その後は、物語の楽しさが損なわれないような区切り方をこころがけながら映画の視聴、句の合評会を行った。

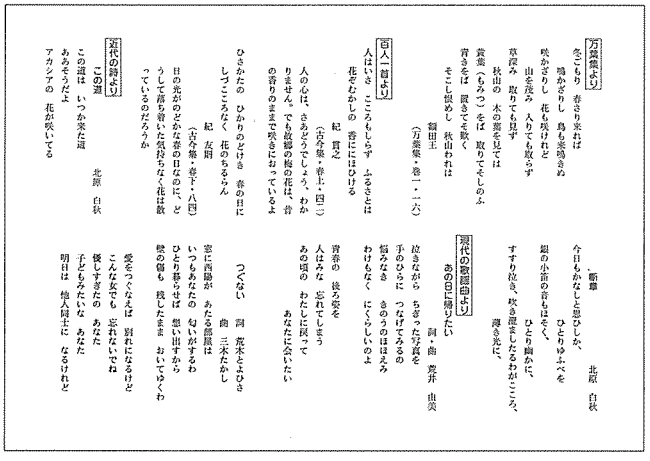
●第1回

《本時のねらい》

1．導入

2．日本古来の「5・7」のリズムについて興味を持ってもらうこと

導入は映画の予告編を使って行う。予告編では、5人の俳句部員がわかりやすく紹介される。ニックネームなどわかりにくいところもあるので、他の登場人物もあわせて確認をし、映画のあらすじを紹介する。俳句初心者の高校生たちが主役ということで、年代的にも近く、自分たちにも作ることができそう、と感じてもらえるようだ。「5・7」リズムの理解のために、ハンドアウト（資料①）を用意し、万葉集の長歌・短歌から、百人一首のかるたから、近代の定型詩から、さらに最近の流行歌から例をとり、参考資料とする。第1回の授業は、こちらの自己紹介や、授業全体の説明等もあるので、この内容でいっぱいになる。



資料①

配慮することは、映画の会話スピードの確認である。聞き取りがむずかしいという学生がいれば全編のスクリプトを用意したこともあるが、ほとんどの場合、J/MAクラスでは必要なかった。目的がある場合に、部分的に用いている。（それについては、個々の時間の授業展開を述べるなかで少し示している。）

板書…黒板中央に　≪十七文字でしか表せない「さがしもの」≫

●第2回

《本時のねらい》

1．「甲子園」のように、単なる地名ではなく、日本人が一定のイメージを持って接する地

名が多くあることを理解させる。

2．アンケート調査（上記のねらいを理解するために実施）

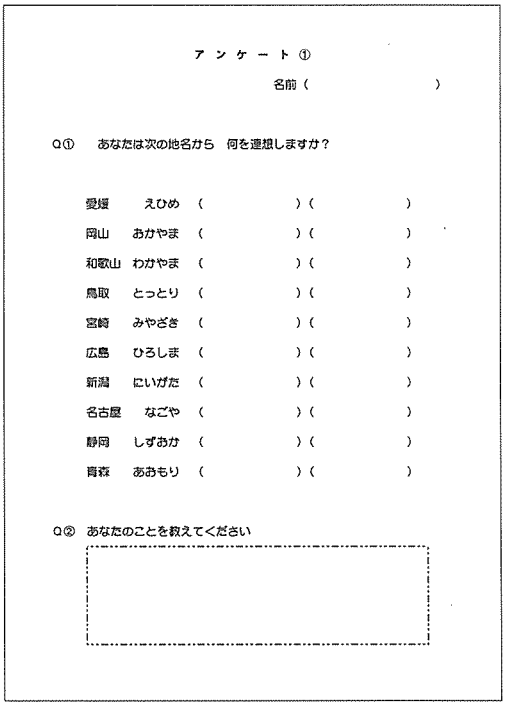
シーン１（オープニング）の前半を視聴する。学生たちにとっては、制服の高校生たちの応援席、プラスチックのメガホン、ブラスバンドの独特の演奏、チアリーダーの応援、「あとひとり！」コールなど、夏の風物詩とも言える全国高校生野球選手権大会地方予選の風景を垣間見ることができる場面である。

高校野球地方大会決勝、盛り上がる応援席に傍観者的に高山治子が登場する。ついでチアガールのマコ、ウクレレを持ったピーちゃん、写真部の腕章をつけたツッチーが観客席に見える。最後に野球部補欠メンバーで俳句好きのヤマギシが、逆転サヨナラホームランを見送り、この映画最初の俳句「蒼穹に　夢つれ去りし　ホームラン」を詠む。

応援席の場面、後方に「目指せ！甲子園」の黄色の横断幕が出てくるので、それをきっかけとして、「甲子園」について考える。この言葉を聞いて単に地図上の地名として想起する日本人はほとんどいないし、学生に発言を求めても、連想される語として、阪神タイガース、高校野球などの語は出てくることが多い。同様に、連想される一定の事柄や言葉をもつ地名が多くあり、それはある種の文化ともいえる。

本時のねらいに沿って、多くの日本人が地名から連想する事柄について理解し、その具体例を調べるためにアンケート調査を実施する。シートは資料②として右に示している。アンケートの実施にあたっては、とにもかくにも会話の機会を作ることも目的のひとつであるので、注意する点として、①自己紹介をすること　②授業で使う資料とするためのアンケートであることを説明すること　③協力者にシートをわたして書いてもらうのではなく、口頭で質問して自分で書くことの３点を約束事として確認するようにしている。

アンケート結果の整理・分析と、その発表方法について考え準備することが本時のホームワークとなる。



アンケート①

名前（　　）

Q①　あなたは次の地名から　何を連想しますか？

愛媛	えひめ	（　　）	（　　）
岡山	おかやま	（　　）	（　　）
和歌山	わかやま	（　　）	（　　）
鳥取	とっとり	（　　）	（　　）
宮崎	みやざき	（　　）	（　　）
広島	ひろしま	（　　）	（　　）
新潟	にいがた	（　　）	（　　）
名古屋	なごや	（　　）	（　　）
静岡	しずおか	（　　）	（　　）
青森	あおもり	（　　）	（　　）

Q②　あなたのことを教えてください

資料②

●第３回

《本時のねらい》

１．宿題で整理してきたアンケートの結果をもとに、各自の結果を発表する。

２．俳諧の歴史について基礎的な知識を得る。

３．少子高齢化と学校の統廃合問題について考え、ディスカッションする。

発表では同じような内容になりやすいので、結果の報告だけに終わらず、必ず自分自身の意見を述べるように指導する。自身の調査結果や、他の学生の発表から、日本人一般に共通する認識があることへの理解に至る。学生の調査の結果が順当なものであることを認めるため、果物通販のチラシなどを視覚資料として提示。

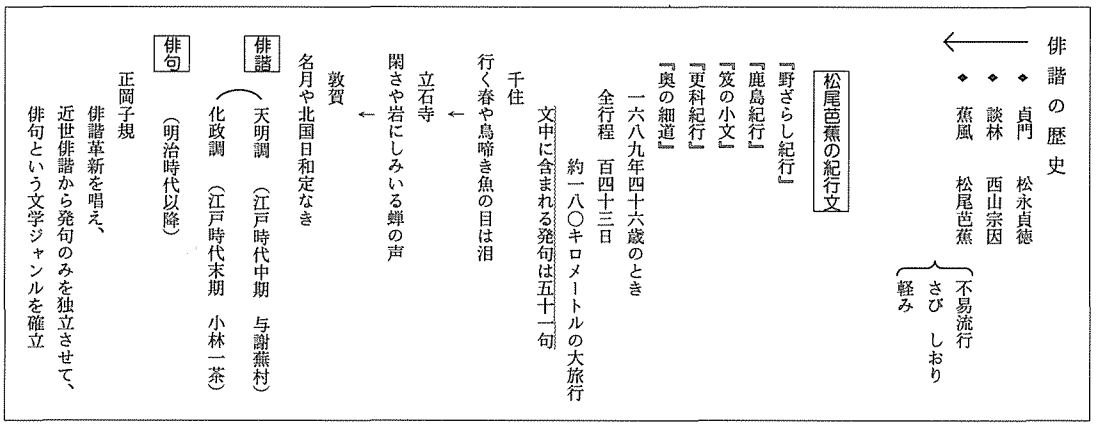
シーン１後半を視聴する。自転車通学の治子、BGMはキャンディーズの「年下の男の子」（インストルメンツ）。校門では松尾高校統廃合反対の署名を呼びかける生徒たち。「興味ないから」と通り過ぎる治子。続いて気弱な高田先生の国語授業、生徒たちはあまり話を聞いていないが、高田は一生懸命に「俳諧の歴史」の授業をしている。その騒然とした場面に驚く学生もいたが、現実にこのような授業風景もあることを伝えるにとどめた。学生が実施したアンケートの結果は後掲している。（参考資料１）

授業風景のシーンの中の、板書（資料③）を利用しつつ、芭蕉以前の近世俳諧から、正岡子規、さらに高浜虚子へとつながる歴史を簡単に説明し、各自が興味をもつテーマを以下の中から選んでもらい、次回以降の授業における発表テーマとする。

５・７のリズムについて　　少子高齢化問題について　　松尾芭蕉について

正岡子規について　　アイドル文化について[9)]

ホームワークとして、上記の発表準備と、５・７・５の短詩作成。



資料③

●第４回

《本時のねらい》

１．前回選んだテーマについて、各自調べたことを発表する。

２．松山高校生俳句甲子園について、競技の方法などを映画の中の高田先生の説明から理解する。

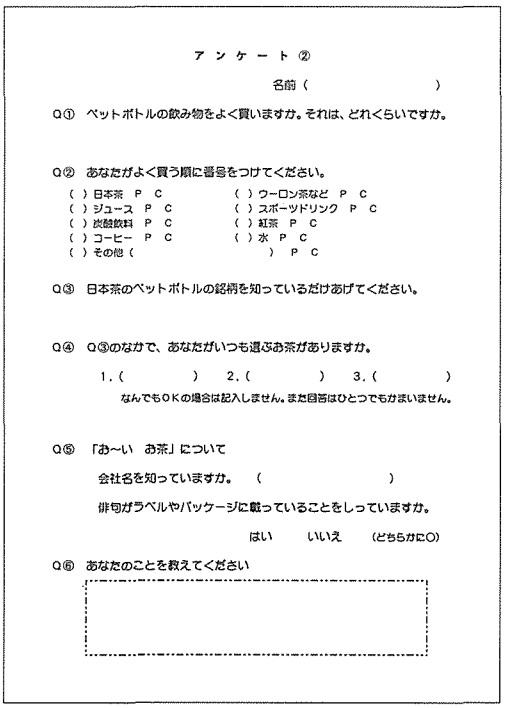
３．高校生の自然な日常の会話に親しむ。

４．ペットボトルの消費や若者の嗜好などについてディスカッションし、アンケートを実施する。

発表と質疑応答の後、シーン２（辞世の句）とシーン3（俳句甲子園？）前半を視聴する。映

画のシーンから「お〜い　お茶」のパッケージに俳句が載っていること、俳句甲子園の試合形式などを知ってもらう。(「お〜い　お茶」紙パック、ペットボトル、缶など、すべてに俳句が載せられているので、視覚に訴える小道具として実物を必ず用意している。)

学生の活動時間が少なくならないように、映画のシーンをできるだけ多く利用して、必要なことを伝えていくようにする。ここでは、日常の若者ことばが多く使われるので、スクリプトを併用している。(太字の部分が俳句の説明に利用する箇所である。) スクリプト①は、担任が治子に俳句部入部を勧めている場面で、俳句のスタートラインに立つ主人公の心境があらわれるところである。学生も日常の若者ことばに触れつつ、特に治子の最初の会話などには共感しながら入っていくことができる。



アンケート②

名前（　　）

Q① ペットボトルの飲み物をよく買いますか。それは、どれくらいですか。

Q② あなたがよく買う順に番号をつけてください。

（ ）日本茶　P C　　（ ）ウーロン茶など　P C
（ ）ジュース　P C　　（ ）スポーツドリンク　P C
（ ）炭酸飲料　P C　　（ ）紅茶　P C
（ ）コーヒー　P C　　（ ）水　P C
（ ）その他（　　）　P C

Q③ 日本茶のペットボトルの銘柄を知っているだけあげてください。

Q④ Q③のなかで、あなたがいつも選ぶお茶がありますか。

1.（　　）　2.（　　）　3.（　　）

なんでもOKの場合は記入しません。また回答はひとつでもかまいません。

Q⑤ 「お〜い　お茶」について

会社名を知っていますか。　（　　）

俳句がラベルやパッケージに載っていることをしっていますか。

はい　　いいえ　　(どちらかに○)

Q⑥ あなたのことを教えてください

資料④

スクリプト①

担任：あなたの答案チェックするの、けっこうたいへんなのよ。和訳しなさいってとこ、全部ひらがなでしょう。読みづらいのよね。いくら帰国子女だからって、最低限の漢字書けないと、将来こまるわよ。

治子：そんなことないですよ。メールするときとか、変換すればすぐに漢字出てくるし。……漢字書けない代わりに英語はしゃべれるし、それでチャラってことで、ね。

担任：私もそうしてあげたいのは山々なんだけど、そうもいかないのよね。ほかの先生からも苦情が絶えないし。

治子：え〜もうチョーやだ。そういう日本的な考え方。決まりだからしょうがないとか。ほんとくだらない。

担任：あなたがいろいろな意味でカルチャーギャップを感じているのはわかるのよ。

治子：カルチャーギャップどころじゃないですよ。男子はみんなばかで幼稚だし、カッコイイ子もいないし。

担任：でもね、日本の悪いところばっかり見ていてもだめだと思うの。あなたのいけない所は、日本の心を知ろうとしないこと。

治子：日本の心・・・？

続いてスクリプト②は、高田が黒板を使いながら俳句甲子園の説明をする場面である。プリントは作成しないが、後半の競技の場面を、よく理解したうえで視聴してほしいので、ストップモーションをかけて、そのまま競技方法の説明として用いている。

スクリプト②　俳句部の部室で、国語教師高田が俳句甲子園について説明をする場面

高田：俳句というのはですね、えっと・・・五・七・五という十七音に凝縮されたわずかなことばの空間にイメージを解き放ち、え～

治子：そんなことはどうでもいいからさ、どうすりゃいいの？

高田：あ、すいません。えっと、八月の十三日から三日間、愛媛県の松山市において、俳句甲子園大会が開催されます。

治子：八月って夏休み中じゃん。かんべんしてよ。

高田：あの、試合の進め方は、各校、五人ひと組になって、紅白に分かれ、順番に各自の句を詠み、そしてその句について三分間の質疑応答をしていくと・・・

・・・＜中略＞・・・

山岸：待ちたまえ！ぼくはどうしても出場したい！ぼくは「お～いお茶」の投稿俳句に何十回も応募してるのに、まだ一度も入選したことがないんだ。いったい伊藤園はなにしてんだよ。こんないたいけな少年のささやかな夢を踏みにじってさ。

治子：それは単にあんたの俳句が下手なんでしょう。

・・・＜中略＞・・・

ちょっとみんなよく考えてよ。俳句なんてダサいっちゅうの。単なるじじばばの趣味だってば。ぜんぜんかっこよくないし、おしゃれじゃないし、何で俳句なのよ。

山岸：俳句はダサくなんかない。今や俳句は、ポップなんだぞ。

治子：あんたのシンプルな顔で、俳句はポップって言われても、説得力ないっつうの。

・・・＜中略＞・・・

Pちゃん：あ、いた！治子先輩！今日からピーちゃんは、治子先輩についていきます。なにかやるんですか。

山岸：俳句だよ。

Pちゃん：はいく？ハイキングのハイク？なんでもいいです。治子先輩といっしょなら。

多くの日本人がペットボトルを持ち歩いていることについて、中でも日本茶のペットボトルは独特のものであるので、出身国との比較から、興味深く観察している学生も少なくない。今回のアンケート（前頁資料④）は、設問作りも含め、彼らの日ごろの疑問から出発した取り組みであるため、積極的に調査に取り組む様子が見られる。注意点と確認事項は前回と同じだが、今回は、自分自身の傾向や、調査結果の予想をたててみるように促した。

この週のホームワークは、短詩作成と発表準備となる。なお、この段階でのホームワークの短詩は、提出させ、読み上げるだけにしている。（次の第５回も同様。）

●第５回

《本時のねらい》

１．調査について発表と質疑応答を行う。

２．「季語」「切れ字」について理解する。

アンケート調査の発表は、互いの出身国の傾向など、興味を持って聞く様子が見られるので、

いつも活発な質疑応答が期待できる。ディスカッションを呼び込むような働きかけ、ことばかけが重要である。アンケート結果の概要は後掲している。（参考資料２）

シーン３の後半を視聴して、俳句のルールについて少しずつ学ぶ。ここでもスクリプトを使用している。スクリプト③は、俳句部の部室で、メンバーが所在なげに集まっている光景である。太字で示した箇所を中心に、季語と切れ字についてごく簡単に説明を加える。劇中の彼らも、あまりよくわかっていないがとりあえず作ってみよう！という状況であり、受講生たちもそれにシンクロしていけばいいので、詳しい説明は行わない。

スクリプト③

Ｐちゃん：ウクレレの　音色が響く　俳句部に　ジャカジャン！

山岸：ピーちゃんそれは俳句ではなく、現状をただ五・七・五にしてるだけではないですか。

Ｐちゃん：え、だって、それでいいんでしょ。

山岸：いや、それがそう単純じゃないんだなあ……**ちょっとしたルールがあるんだよ。**

Ｐちゃん：ルール？　そんなもんあるんすか。

山岸：**まず、季語っていうの入れないといけないし。**

Ｐちゃん：なにそれ。

山岸：**季節を表す言葉。たとえば簡単なやつだと、桜は春の季語、ハンカチは夏の季語、月は秋の季語とかね。**

Ｐちゃん：え～なんかチョーめんどくさい。

治子：だから初めから言ってんじゃん。

山岸：あと、**切れ字**っていうのがあって、

Ｐちゃん：なにそれ？

・・・＜中略＞・・・

高田：**切れ字というのはですね、や、かな、けりというのが代表的な切れ字なんですけれども、有名な句で言うと、「古池や　かわずとびこむ　水の音」の「古池や」の「や」が切れ字なんですが、これがもし、「古池に」だったとしたら、なんていうか、微妙に、その・・情緒が伝わってこないというか・・・**

山岸：**つまり、意味や調子をいったんそこで切って、後を響かせ、より作者の心情を表すってことかな。**

Ｐちゃん：あ～、なんか、「古池に」より、「古池や」のほうが、俳句っぽいかも。

山岸：**心に響くような感じするよね。**

治子：でもさ、そんな理屈がわかったところで、どうすりゃいいの？ああ、やっぱ俳句なんてかっこ悪いよ。

・・・＜中略＞・・・

高田：難しい勉強は後回しにして、とりあえずみんなで俳句作ってみませんか。

山岸：**お題は？**

高田：じゃあ、レモンで。

ホームワークは、季語と切れ字を使った俳句作りである。

●第6回から第13回

俳句の合評会で、自由に感想を述べ合うこと、シーン4以降の視聴を、適宜分けて行うことが、授業のおもな内容となるのだが、合評会だけでは会話実習として少し物足りない感があるので、いくつかのテーマについて口頭発表を入れるようにしている。先に決めていたが発表を遅らせていたテーマ「アイドル文化」「正岡子規」に加えて、これも映画の中に出てくることから、「ドラえもん」などのアニメ文化についても、よくとりあげてきた。なお、俳句作りは、映画に倣って「お題」を決めるようにした。ほとんどの場合、学生からの提案をそのまま利用する。いままでに登場したお題は、「傘」「風船」「うどん」「月」「トマト」「雪」など多彩である。シーン5以降はスクリプトを使わずに、また、途中でストップモーションをかけることも控えて、物語を楽しむことを大切にしている。しかし、シーン4では、学生が俳句作りをするときにヒントになる内容があるので、一部のみスクリプト④として用意したので、以下に示している。

スクリプト④

高田：**もともと、俳句というのは、一人目が五七五を書いて、次の人が七七とつなげる。……この最初の五七五だけが独立して成り立ったわけですね、つまり、俳句というのは長いお話の導入部分であって、だからこそ、なぞと期待感があふれてくると、こういうわけです。**

Pちゃん：**謎と期待感ね…よし！便秘には　レモンジュースが　効くらしい。ジャカジャン！**

山岸：その句のいったいどこに**謎と期待感**があるっていうんだい？

・・・＜中略＞・・・

Pちゃん：治子先輩のは？

治子：空高く　レモンを投げる　昼休み

山岸：うん、悪くない。

高田：うん、空の色とレモンの色の対照があざやかなかんじで、なかなかいいと思います。

【合評会の方法と実際】

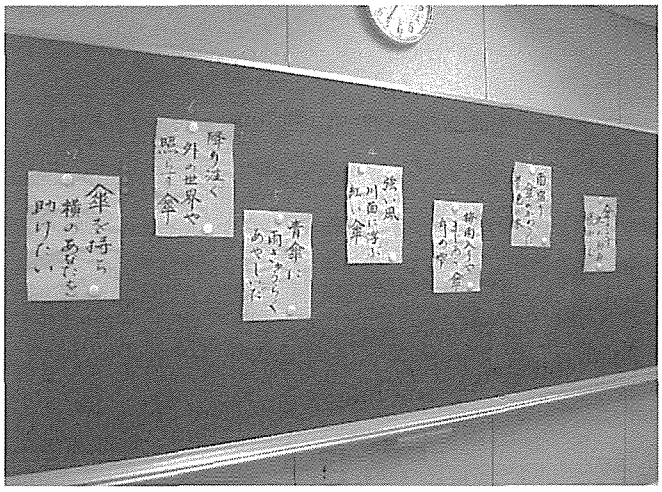
合評会は、ＮＨＫ、ＢＳ放送の『俳句王国』に倣って実施している。（学生の中には、映画の中で紹介されている松山俳句甲子園の方法に興味を持つ者もいるので、試みてみたいと考えてはいる。）

今週提出、次週句会では、時間があきすぎて、活発な質疑応答にならないようでもあるため、授業はじめに提出してもらい、学生が映画を視聴している間に、私が半紙に墨汁で作品を書く。映画の視聴が終わったら、黒板に白のマグネットでとめて掲示する。学生は自分の作品以外から2作品ずつ、支持する作品を選択する。選択された作品の右肩に赤の小さなマグネットで、得点を示し、高得点句から順に合評会に入る。作品を選んだ学生が、

① どこがよかったか

② どのような情景を思い描いたか

③　どんな思いが込められていると予想するか



などを自由に発表したあと、作者が名乗り、作品の意図を述べ、批評に対する感想などを述べる。学生の反応は大変よく、自身の作品に高得点がついたときは、携帯のカメラで、黒板に掲示された自分の俳句を撮影したりする姿が見られる。

学生の俳句は上手ではないかもしれないが、時に、故国の家族を思うような留学生ならではの作品が見られるなど、感動することもある。「粉雪や　母の髪には降らないで」という作品で、作者が、「会えない一年の間に、母が年をとって白髪が増えているのではないかと心配だ」という気持ちで作ったと述べると、共感して涙を浮かべるものもあった。俳句のスキルを学ぶ授業ではない（それは私にはできない）が、５・７・５の少ない字数に、いろんな意味や思いを込めることができるということを学んでくれたと感じている。込める思いが多いので、合評会ではみなが雄弁になる。自分の意図を理解してほしいという思いが強くなると、しっかりした発表になる。句会の形式に助けられて、発言の機会をかなり平等に近く確保できたと思う。（学生の作った俳句は参考資料３として後掲した。）

また、高得点の俳句で、選んだ側の学生たちが、それぞれ、作品から受け取った感動やイメージなどを熱く語ってくれたあとで、作者が、「実は宿題を忘れていて、提出前の３分間で大急ぎで考えて作った」ことを種明かしして大笑いになったこともあった。作り手の意図と読み手のイメージが異なるということも、俳句ではよくあるのだということを、学生たちは学びとったようだった。

５・７・５の、慣れない俳句作りであるにもかかわらず、そのなかに個性がはっきりと表れることも興味深い。私からはわからなかったが、お互いの性格をある程度理解している学生同士の間では、掲示されるとすぐに作者の見当がつく、という場面が何度も見られた。

以上のような学生の態度は、俳句の持つ特性の理解に近づいているものであると考える。作品自体のレベルにこだわらなくても、内容のあるディスカッションが可能であり、ここまで本質に近づくのだと、学生たちの持つ力に感動を覚えた。

【合評会形式の会話授業の分析と反省】

句会の模倣のような、私の会話実習の授業のよい点は、受講者数が多い場合にも、すべての学生にほぼ均等・公平に発言の機会と時間が与えられるという点と、形式が決まっているので、教師の出番が限られ、つい教師が多くの講義時間を使ってしまい学生の発言時間を奪ってしまう、という状況に陥りにくい点である。

一方、しかしながら、「なんとなく感じる」という種の発言が多くなりがちで、口頭発表・質疑応答のスキルトレーニングの面では物足りなさが残るので、合評会だけが毎回続くという状況は避けたい。テーマに基づく発表などを適宜とりいれたり、質疑応答時に教師の側からの誘

導、働きかけの必要がある。

なお、第13回の授業では、実際の俳句甲子園のドキュメンタリーを録画したものを視聴した。『恋は五・七・五！』の中に出てくる対戦校たちに似ている高校があって、学生たちの反応はたいへんよかった。[10] また、学生の協力を得て、以下の内容で、授業の振り返りの質問シートに答えてもらった。[11]

Ⅳ. まとめにかえて

今回の報告は、J/MAクラス対象の日本語実習上級会話の授業、半期15コマ中13コマを使って行っている授業についてのものである。視聴覚教材という視点で映画を選ぶ際の指標づくりの試みを軸に、その指標にしたがって選択した映画を使って、どのような授業が展開できるかを、実践報告させていただいた。授業では欲張って、次第にいろんな要素を入れようとしてきたので、最終的にもりだくさんになりすぎているかもしれないが、散漫にならないように、目標とするところの全体像の中で、1コマごとのねらいを意識するように心がけたつもりである。半期全授業をひとつの映画で行う場合、映画によっては、あまりに寸断されてしまい、楽しさが伝わりにくく、後半に若干の意欲減退が見られたものもある。映画ごとに、適正なコマ数を決めていかなくてはいけないだろう。実際には、5，6コマがやりやすい、というものが多かった。今回の『恋は五・七・五！』を使った授業でも、学生が発表したいテーマを持っているときなどは、映画の中からテーマを引き出さず、口頭発表の練習は映画から切り離して行ったこともあり、その場合は全体の授業構成が変わるので、8コマくらいにまとまった。

受講生が少なく、句の合評会が成立しない学期もあったり、多すぎて発言時間が確保できない学期もあったが、いずれの授業でも、学生は俳句に親しみ、日本の四季をことばから知ろうとする態度を身につけてくれたように思う。中には、学期終了後も、伊藤園のサイトから俳句の投稿を続けている学生もいる。

『恋は五・七・五！』は、若者の自然な会話を学ぶことも含め、楽しく話題を広げることができる映画であったけれど、いわゆる若者ことばはどんどん変化していくので、いつまでも使えるわけではない。映画選択の指標についても、まだ十分ではないとわかっている。この報告をひとつの区切りとして、また、新しい教材となる映画を探していきたいと考えている。

注

1．「映画がその受容において漫画や小説などと大きく異なる点がある。それは映画がほかの物語媒体にくらべて、きわめて緊密な継起性をもっているという点である。映画の物語の構成単位（ショットやシーンやシークェンス）はリニアに編集され、その直線的結合ぶりはほとんど鉄道を思わせる。映画のこの物理的前提なしには、登場人物のいかなる運動（モーション）も情動（エモーション）もありえない。映画の物語展開はあくまでも物語単位の一方向的継起性のうえになっており、観客の物語受容は、映画のこの物理的制約から自由ではありえない。映画の観客は小説や漫画の読者とはちがい、ページを読み飛ばしたり後もどりするような緩やかな自由は与えられてはいない。」　加藤幹郎『映画とは何か』みすず書房（2001）

2．家庭内での丁寧な敬語表現など、現代にそぐわないものが目立つ。小津安二郎の文体については多く論じられている。ドナルド・リチー『小津安二郎の美学』（山本喜久男・訳）フィルムアート社（1978）、デヴィッド・ボードウェル『小津安二郎　映画の詩学』（杉山昭夫・訳）青土社（1992）など、外国の研究者も多い。

3．『ナビィの恋』（監督　中江裕司 1999）『スウィングガールズ』（監督　矢口史靖　2004）など

4．これ以外にもいくつか選んだ映画について、高月喜美・小南淳子『―中・上級学習者のための―　マスメディアの日本語聴解』大阪大学日本語日本文化教育センター（2010）の第19課において、あらすじと授業展開の可能性などを示している。

5．村上春樹『レキシントンの幽霊』文芸春秋社（1999）

6．村上春樹『若い読者のための短編小説案内』文芸春秋社（2004）

7．森下裕美『大阪ハムレット』双葉社（漫画アクション連載4コマ漫画、単行本は第1巻2006～）

8．西岸良平『三丁目の夕日』小学館（ビッグコミックオリジナル連載4コマ漫画、単行本は1975～）

9．このうちアイドル文化についてはシーン7（やさしい悪魔）を、正岡子規についてはシーン16（いよいよ準決勝）を視聴するときにあわせて発表するようにしている。

10．ドキュメンタリー番組からの録画ＤＶＤは、本センター非常勤講師の高月喜美さんが、提供してくれた。（『NNNドキュメント'10』2010年8月30日読売テレビ放送）

11．質問シートは以下の内容である。

この授業は、上級会話の授業でした。それに相応しい内容であったかどうかについて、改めて考えてみて下さい。たとえば、句会は、受講者が多いことによって発言の機会が少なくなることを考慮して、全員が話す機会を持てるようにと考えたものだったのですが、

上級会話のトレーニングとしての効果はどうでしたか？次から選んでください。（複数回答可）

（　）発言の機会も多くあったので、それなりにトレーニングの効果はあったと思う

（　）俳句作りは苦手で、あまり楽しめなかった。

（　）五・七・五の、日本古来のリズムを実感できた。

（　）俳句作りに興味を持つことができ、これからも、作ってみたい。

（　）句会で、得点が入るのが楽しみだった。高得点の時は嬉しかった。

（　）俳句作りは面白かったが、この授業の句会で、会話能力がアップしたとは思えない。

その他（　　）

ほかには、授業で印象に残ったことはどんなことですか？

これからの、自分自身の会話の学習に、何が必要だと考えていますか？

また、これからどんなことをしていく予定ですか？

などの質問をしている。

学生の回答は、前向きなものが多く、授業に楽しんで参加してくれたようであったが、なかには、俳句作りを楽しめなかった、発言時間が少なくて物足りなかったと、いう意見もあった。真摯に受け止め、さらに工夫をしていかなくては、と考えている。

参考資料

1．アンケート①の結果の概要

愛　媛／みかん　ポンジュース　松山城　今治のタオル　道後温泉　造船　『坊ちゃん』　秋山兄弟

岡　山／桃　桃太郎　きび団子　マスカット　後楽園　倉敷　瀬戸大橋

和歌山／梅　みかん　柿　白浜　熊野　関西空港　カレー事件　パンダ　ラーメン　アドベンチャーワールド

鳥　取／砂丘　なし　境港　うさぎ　人口が少ない

宮　崎／マンゴー　ピーマン　東国原知事　ひや汁　どげんかせんといかん

広　島／原爆　お好み焼き（広島焼き）　もみじ饅頭　カープ　厳島神社　じゃけぇ

新　潟／米　もち　美人　雪　酒　中越地震　日米修好通商条約　上杉謙信

名古屋／結婚式　味噌煮込みうどん　名古屋コーチン　中日ドラゴンズ　名古屋城　しゃちほこ　エビフライ　ひつまぶし　きしめん　トヨタ　愛知万博　ういろう　手羽先

静　岡／富士山　サッカー　お茶　うなぎ　ちびまるこちゃん　徳川家康

青　森／りんご　ねぶた祭り　なまはげ　方言　青函トンネル　津軽海峡　カーリング（チーム青森）

※学生の感想としては、「日本は広いと思った」「自分が知らないことを、日本人がみんな同じ答えをするので、おどろいた」「自分の新しいイメージも広がった」「名所と食べ物を連想する人が多い」「日本人は食べ物が大事らしい」「名古屋はおもしろそう」など。また、「Q②で、あなたのことを教えてください、と言ったら、ユニークな答えが出てきて楽しかった」という意見もあった。

2．アンケート②の結果の概要

Q①ペットボトルの消費は、個人差が大きいが、多い人では一日に２～３本や週に10本以上という回答もあったようだ。週に４，５本という人が多く、学生たちは、日本人学生の平均と分析した。

Q②よく買う種類のアンケートでは、缶よりペットボトルのほうが圧倒的に多く、留学生を対象に調査をすると、コーラやジュースが多いのに、日本人は日本茶を一番よく買っているという結果になった。ついでウーロン茶、紅茶が人気。運動部の人は、大きなスポーツドリンクを持ち歩いていた、などの結果を得た。

Q③～④で、日本人が知っているペットボトルの日本茶の銘柄の中に、映画に出てくる「お～い　お茶」が必ず入っていることや、70％ほどの日本人がその会社名も知っていること、会社名を知らない人でもほとんどの人がラベルに俳句が載っているのを知っていること、などを確認できた。

※学生の感想は、「ペットボトルのお茶を買う人が多くておどろいた」「お茶はカロリーが低いからいいと思う」「日本人がお茶をよく持っていると思っていたから予想通りだった」など。映画に出てくる小道具としてのお茶のパックが、「日本人にはなじみの深いものであるということを調査から理解できた」という意見もあった。

3．学生が作った俳句から、支持の多かったものを中心に抜粋してみた。（　）内は題。

風船や　空をただよう　夢の音　（風船）

風船や　楽しんでいた　子のころへ　（風船）

ゆうゆうと　青空あるく　旅人だ　（風船）

時雨降る　あの日の君と　雨宿り　（雨）

雨の中では　虹と雲が　ダンスよ　（雨）

国思う　夏のどしゃぶりに　会いたい（雨）

取りにくき　心の舵や　五月雨　（雨）

そよそよと　雪舞い降りる　黙示録　（雪）

なごり雪　君色おもひ　涙（なだ）にじむ　（雪）

傘を持ち　横のあなたを　助けたい　（傘）

僕　月を見る　恋人は　月を見る　（月）

泣きながら　青いトマトを　かじりけり　（トマト）
春のにおいがする　さくらが　さくさく　（春）
せみしぐれ　木陰に横たわる　ふたりきり　（蝉）
セミのうた　しずかな夜に　（蝉）＜自由律に挑戦＞
おくりびと　おくられびとや　わたしたち　（自由）
最高に　愉快な気分　愚か者　（自由）
流れゆく　初恋列車　どこまでも　（自由）
わたしだけ　今年の秋に　悩んでる　（自由）
その坂と　はなればなれに　なるなんて　（自由）＜「坂」は大学の正門までの坂＞
青い空　日本へ向かう　つるの群れ　（自由）

（こみなみ　あつこ　本センター非常勤講師）